

「帯江研」だより

帯江鉦山研究会事務局
岡山市東区益野町295-15 坂本方
E-メール
obieken913@yahoo.co.jp

ニュース通信

◇21・5・16

中庄・木村屋で開催する予定だった第5回役員会は、岡山など宣言下でコロナ禍感染ステージが改善しないため、急遽メール交換による協議を実施。「帯江研だより」臨時号(7月予定)の発行など決めた。

◇21・6・13

第1回総会・例会はコロナウイロスの第四波感染拡大により中止を決めた。小西代表は当面、役員会を含め参加型総会、諸行事を中止し、今総会は書面表決によることとした。

◇書面表決の結果報告

21・5・31を締切日とした書面表決の賛否は賛成13(小西代表は除く)で、全員が賛同。第1号議案、第2号議案、第3号議案は原議案通り承認された。

明治時代を代表する建築資材・煉瓦

帯江鉦山跡に、1907(明治40)年ごろ完成した火力発電所の煉瓦煙突がある。それと同じ八角形煉瓦造煙突は全国各地に造られ、岡山県内では備前市三石の三石耐火煉瓦、岡山市北区の三野浄水場、岡山市東区の犬島製錬所跡にも現存する。完成年はそれぞれ明治20年代後半、1905年ごろ、1908年ごろだが、1882(明治15)年に操業を開始した下村紡績所(児島)と玉島紡績所、1917(大正6)年に創業した日本綿布(井原市)の煙突も八角形煉瓦造であった。



倉敷市黒崎に残されている帯江鉦山火力発電所の煙突は、煉瓦をイギリス積みしたもの。八角形の角には2種類の異型煉瓦、上に行くほど塔身を細くするための調整煉瓦が使われている。この煉瓦が焼かれた場所は今後の調査課題。(撮影者 小西伸彦)

煉瓦は明治時代を代表する建築資材である。1871(明治4)年大蔵省金銀分析所と竹橋陣営、1872年富岡製糸場、1873年には銀座赤煉瓦街が竣工したが、正しい西洋建築が建てられるようになったのは工部省が設立された1870年以降である。第一号となったのは、1872年に招聘されたフランス系イギリス人ポアンヴィルが設計し、1877年に完成した煉瓦造ヴィクトリア朝期ネオルネサンス様式の工部大学校講堂である。

鉄道も、全国に煉瓦を広めた功労者の一人である。1872年に開業した新橋・横浜間には石が使われたが、大阪・神戸間の敷設では1870年11月、堺大浜通り(現在の堺市)に煉瓦製造所が設けられ、お雇い外国人が陶器職人や瓦職人を指導した。煉瓦製造に適した良質の粘土、燃料となる松薪、輸送条件に恵まれた泉州はその後、関西を代表する煉瓦生産地になった。岡山県内では玉島紡績所跡の煉瓦に堺煉瓦、1891(明治24)年に開業した山陽線上郡・吉永間のトンネルや橋梁の煉瓦に堺煉瓦と岸和田煉瓦の刻印があり、半田山配水地や宇野線の敷設現場にも泉州の煉瓦が運ばれた。

山陽鉄道会社は泉州の煉瓦を船で運び、片上や西大寺、福島(岡山市南区)などに陸揚げするとともに、三石、和氣、浮田村梶岡(岡山市東区上道北方)に鉄道専用の煉瓦製造所を建設した。1889年ごろの「山陽新報」には梶岡煉瓦製造所の記事が頻繁に登場する。鉄道敷設現場近くで煉瓦を焼き、そこから供給する方法は各地で採用され、1898年に開業した中国鉄道岡山市・津山(津山口)間では、福渡(岡山市北区)で煉瓦を焼いたという。

あじまわ「帯江研」へ

銅山や産業遺産に興味を持つ研究者、歴史愛好家らが集まって帯江鉦山研究会が出来ました。二〇二〇年秋に岡山市内で産声を挙げた会で、略称は「帯江研」と言います。会では有志の皆さんの参加を歓迎しています。

ところがまだ、氏素性^{うじすじょう}の知らない煉瓦はたくさんある。1889年に操業を始めた倉敷紡績所倉敷工場(倉敷アイビスクエア)の煉瓦は大島郡(山口県大島郡周防大島町)から運ばれたが、帯江鉱山の赤煉瓦がどこで焼かれたのかはまだわかっていない。(小西伸彦)

坂本金弥を語る ■ 3 ■

一家業より鉱山業

父・坂本弥七郎(以下「弥七郎」)は、やはり息子の一件が頭の片隅に引っ掛かっていたのか。関西遊学中の金弥は1887(明治20)年、家督を継ぐため岡山へ呼び戻されている。

岡山藩番頭役の土肥氏家臣だった弥七郎。維新後は質屋兼古物商を営んでいた。当時の古物商は山陽新報(以下「新報」)によると、岡山警察署直轄186箇町村内で1100人、質商は91人を数えたという。

そんな状況下、弥七郎は「兼て質商を営み活計も富裕なる人」と同紙が伝えているから、家業は順調だったのだろう。にも拘らず金弥は、すんなり家督を継がず稼業の傍ら、なお法律を独学し政治活動にも熱を入れていたようだ。「県特高資料」に、そのころの金弥をめぐるメモ書きが記されている。

「明治20年頃坂本金弥一青年ノ身ヲ以テ鶴鳴倶楽部ヲ起シ陰ニ進歩主義ヲ抱藏シ(略)主義を鼓吹シタレバ新進気鋭ノ士競テ之ニ加ハリタリ」

20年のころといえば金弥23歳。政治団体をつくり気脈を通じた若者が呼応し、活動に熱を挙げている、というのだ。

“特高の目”はそれ以降も張り付き、金弥の動静は逐一報告。実に興味深いのだが、ここでは彼と法律の関わりを今少し述べておく。というのも中庄の鉱山所有権をめぐる岡山と神戸在住者が争った裁判で、金弥は同僚の岡本佐市と一緒に大阪控訴院まで出掛け、一方の代人を務めている。

岡本は後に弁護士試験を受け、正式に弁護士となって岡山で事務所を開業。一方、金弥とはといえば、先の裁判が引き金となって鉱業権を譲り受け、帯江鉱山=写真=経営に広く手を染める端緒となっていたのである。

「何んでも1万か2万円の年賦で貰った」
金弥代議士時代の東京邸で書生だった



帯江鉱山とコバノミツバツツジ

おびえナビ

昔、中庄には銅山があった。現在は、その跡地に自動車教習所とゴルフ場が広がっている。銅山は明治後半には県下有数の産出量を誇ったがその盛期は短かった。大正初め操業は停止され、残されたのは一面のはげ山と二本の煙突だった。地元民が「煙突山」と呼んだのはげ山の光景は、一九二(明治四十四)年に発行された『陸軍特別大演習記念写真帖』や大正期の児島虎次郎の一連の「酒津シリーズ」作品に見える。この荒廃したはげ山の風景を変えたのが「コバノミツバツツジ」と地元民が植えた「日向松」であった。記録では、「大正天皇御即位記念事業」として黒崎の



植野蜜太郎を中心に一九一五(大正四)年に七千本、翌年には八千五百本を植樹している。そして昭和の初めまで二十年の歳月をかけて松を育てた。その後のはげ山は緑深い山に変貌した。一方、ツツジは昭和の初めには酒津の桜と同様に当時の新聞や九年発行の倉敷地方観光案内Ⅱ写真・岡山大学資源植物科学研究所分館所蔵Ⅱにも載っていたが姿を消した。それから半世紀以上の時を経て、平成になり「銅山のツツジ」の復活運動がスタートした。一万本のツツジの植樹を目標に現在取り組んでいる。銅山の遺構は中庄の「宝物」。その銅山の遺構とともに「銅山のツツジ」も、次の世代への大切な「贈物」にしたいと願っている。(戸板啓四郎)

佐々木志賀二(和気出身、のち政治家・実業家)は親戚の老人から聞いた話をこう回顧している。“ヤマが当たる”と、やがて財を成した金弥は豊富な資金を惜しげなく投入、数々の舞台を席卷していく。まさに帯江鉱山は、金弥後半生の出発点であった。

(坂本 昇)

有志会員

- ・在間 宣久(元岡山県立記録資料館長)
- ・上田 賢一(元岡山大学非常勤講師)
- ・小西 伸彦(産業遺産学会理事長)
- ・小柳 智裕(就実大学専任講師)
- ・近藤 修六(医療法人六峯会理事長)
- ・坂本 昇(元山陽新聞編集局次長)
- ・柴田 正子(裏千家茶道教授)
- ・高橋 義雄(岡山歴史楽修塾代表)
- ・戸板啓四郎(中庄の歴史を語り継ぐ会代表)
- ・永瀬 彰博(中帯江老人会長)
- ・難波 俊成(岡山人俗学会理事長)
- ・前田 昌義(中庄の歴史を語り継ぐ会員)
- ・村上 節子(文化史研究家)
- ・森元 辰昭(岡山近代史研究会長)